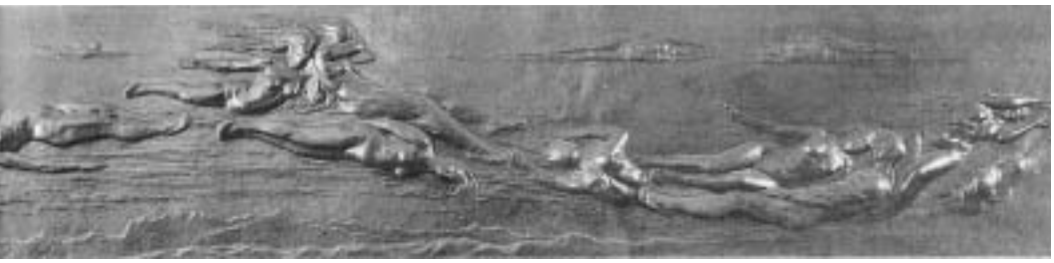
ISSN　0582−4478

京都大学図書館機構報



静脩

2007年３月

The Kyoto University Library Network Bulletin

Vol. 43.　No. 3・4
合併号

京都大学では、平成17年度から全学的事業として学術情報リポジトリの構築への取組みを開始しました。京都大学学術情報リポジトリは、京都大学内で生産された知的生産物を収集、蓄積、保存し、Web上で公開することにより、京都大学の教育研究活動の視認性を高め、その成果を広く社会に還元することを目的としています。京都大学学術情報リポジトリが十分に力を発揮するためには、その役割を学内外に知らせ、登録を促進して、豊富なコンテンツコレクションを形成することが必要です。京都大学図書館機構と京都大学学術情報リポジトリ検討委員会は、京都大学学術情報リポジトリの充実と発展をめざして、平成18年12月20日に桂キャンパスにおいて、公開事業「発信する学術情報コンテンツ―京都大学学術情報リポジトリ構築のために―」を開催しました。本号では、公開事業の基調講演の概要を掲載します。

学術情報のオープンアクセス――何が有効な手段なのか

社団法人日本動物学会事務局長・UniBio Press COE・SPARC運営委員　永 井　裕 子

はじめに

私は一年間だけですが図書館で仕事をしたことがあります。その後、来年には創立130年を迎える日本で一番古い学会のひとつであります動物学会事務局長として仕事をしてまいりました。動物学会はZoological Science という雑誌を刊行しています。

ご存じのように、科学研究の爆発的な量的拡大と商業化、その結果としてのシリアルクライシス(1)、それと近年の電子ジャーナルによってもたらされた世界の中で、我々はどうしていくべきかという話が今日のテーマです。その中で研究者にとって最も良い学術情報流通のあり方、それはたぶんオープンアクセスだと思うのですが、それに学会として、そしてもちろん、研究者として、どう対応していくかということを考えたい。そして、今日のメインである機関リポジトリですが、世界の大学のリポジトリのなかで、京都大学のリポジトリはやっぱりすごいなと思われるようなものを作るためには、研究者の方が、すこしでも、この意味を理解してくださり、自分たちが何をするか、それを考えるきっかけにしていただければ有り難いと思います。

日本の研究成果の海外流出

これまでの日本の学協会誌はビジネスモデルというものを持っていませんでした。自分たちのジャーナルをどう売ろうかなどということを戦略的に考えている学会というのは、物理系と化学系の大きなジャーナル以外はなかったといっていいと思います。そして電子ジャーナルの時代になっても、オープンアクセスではなくフリーアクセスというのが日本の電子ジャーナルの多くのあり方でした。背景としては、日本には特異的に印刷出版費に対する科学研究費補助金というのが存在していまして、こういった状況が非常に複雑に絡みながら、長年こうして学会はやってきたわけです。

一方で、日本の研究成果の80%が海外のジャーナルで発表されています。日本のジャーナルには20%しか掲載されないという状況です。研究者の方なら当たり前のことだと思いますが、海外のジャーナルには歴史があり、良い編集委員が揃っていて、良いエディター・イン・チーフがいて、海外に論文を投稿したいという気持ちは、よくわかります。日本の研究は日本のジャーナルに出しなさいとは言えないと思います。だけど、せめて、その割合は半々ぐらいにしたい。なぜかと言うと、日本は資源がない国ですが、研究者のこの成果というのは、ものすごい資源なのです。これを海外ジャーナルにその多くを持って行かれているということは、海外ジャーナルの価格高騰問題と合わせて考えると本当にそれで良いか？という問題は、浮かび上がると思います。

SPARC運動

SPARC[(2)]、もともとは米国の研究者が考え出した思想だったそうですが、研究者同士の書簡で始まった学術情報のやりとりというのが、だんだん拡大して、ある時期に出版社が入ってきて、出版社が学術情報を研究者に送り届けるということになっていったということです。ここには、無駄が無く、誰もそれはおかしいと思わなかった。出版社はプロであるのですから、お客様、つまり研究者のためにより良い世界を作り出したわけです。もちろん、そこには資本主義原理は働きます。ご存知のように、ある時期から、各国とも科学技術や新しい発見のために研究を支援するという動きが活発になり、当然、研究成果は増大し、論文は増加し、その結果、ジャーナルは厚くなり、価格は高くなっていくということになりました。この循環から商業出版社を排して、研究者、学会、図書館のサークルに取り戻そうというこれがSPARCの当初の基本的考えでした。

さて我が国におけるSPARCは図書館ではなくて、NII（国立情報学研究所）が推進する国の事業になりました。現在、この事業が、成功しているのか、していないかということはまだ分からないのですが、実は日本のSPARCがやった運動というのは後で歴史的に回顧してみれば非常に大きな事になるだろうと、私自身は思っています。つまり、学術情報をどう蓄積するか、情報をどう広めていくか、新しいシステムをどのように自らに役立てるか、そして、もちろん現状の商業出版社のビジネスモデルの研究など、日本でSPARC運動が起こらなければ、日本の学会の多くは、世界を知らないまま、廃れていっていたかもしれません。我が身を含めての話です。

UniBio Pressの事業

さて、そのSPARCの一つの成果であるUniBio Pressの話を少しさせてください。生物学の電子ジャーナルパッケージであるわけですが、その生物学会がSPARCにより初めて、いくつかの学会と連携をしまして、日本で初めて自主的な、また学会連携をおこなった電子ジャーナルパッケージを作り、とにかく売ろうじゃないかということを始めたのです。おかげさまでとにもかくにも図書館の応援を受けて、ここまでやって

きました。また2006年の10月12日にNPO法人になりました。

当初から、米国BioOneとの連携協調は視野にありました。米国BioOne、これは米国SPARCが支援して作った生物系の電子ジャーナルパッケージです。来年からは、UniBio PressはBioOneと連携・協調しまして、BioOne.2というパッケージに参画し、日本の生物系ジャーナルとして売り出すことになりました。しかし、日本では引き続きUniBioの単体売りを認めてもらうように努力しまして、そのことには成功しました。BioOne.2を買わなければ、UniBioが読めなくなるというのでは日本は困る、UniBioは日本の国内図書館に支えてもらって発足したのに、日本の大学図書館にもっとお金を出せとは言えないと粘りに粘って交渉して、譲りませんでした。つまり、商業出版ではないけれど、とにかく、日本の成果を一度「海外」を通さねば購入できないという形、私は避けたかったのです。

さて、このUniBio Pressには来年から、日本アレルギー学会、日本宇宙生物学会がオープンアクセスジャーナルとして参加します。オープンアクセスジャーナルが、何で？と思われるかも知れませんが、オープンアクセス誌こそ、パッケージの中に入ることに意味があります。BioOneは全世界で900大学以上購読されていますが、その大学の図書館から、快適な環境の中で、ジャーナルが購読される、これはグーグルでヒットさせて、アブストラクトを読ませるということとは全く異なることです。BioOne.2がどれほどの図書館に購読されるかはまだわかりませんが、それでも、BioOne購読館では、たとえ、BioOne.2を購入していなくとも、アブストラクトをより簡単に、読んでもらえる可能性がある。宇宙のような空間にある膨大な電子コンテンツの中から、検索にひっかかることを待つよりは、購読されているパッケージの中で、アブストラクトまで読んでもらえる可能性を持つことのほうが、よりそのジャーナルは認知されるということです。

オープンアクセスとフリーアクセスの違い

さて、「オープンアクセス」についてです。本来の意味は学術論文に対するアクセスに、障壁がないということです。ここにはよく考えてみますと、いろいろな問題が存在しており、ここ数年、オープンアクセス方針について、世界では国の政策として論議がさかんに行われています。しかし、日本の学協会の中には、フリーアクセスとオープンアクセスを取り違えておられる学会があります。オープンアクセスにジャーナルの方針を変更するという場合の基本的な在り方は次のようになります。これまでは購読料を取ってそれで曲がりなりにでも、出版費を賄っていたけれども、購読料を頂かないで、その代わりに何かによって出版を支えるかということです。購読をベースにした形では、購読館しかジャーナルを読めないのだから、それをやめて、その代替で、ジャーナルに掲載された研究成果をオープンにするという考えが「ジャーナルをオープンアクセスにする」という実際的なありかたです。もちろん、すべて学会会費で賄っている「オープンアクセス」もありますが、難しいのは、「本当にそれで皆がそのジャーナルを読み、ジャーナルが良くなっていくのか？」という現実的な問題があります。話が飛んで申し訳ありませんが、やはりすでに地位を確立したジャーナルが「オープンアクセス化」するのは、できるのであれば、薦められる方向性であるように思います。しかし、見えていなかったジャーナルが、フリーアクセスでさらによくなっていくか？と言われれば、私は「はいそうです」とはなかなか申し上げられないということです。

さて、現状ではオープンアクセスを可能にするとして、英国JISC（情報システム合同委員会）が推奨しているモデルがあります。そのひとつが「著者負担モデル」であり、もうひとつが「機

関リポジトリ」であるということです。例えば、有力誌が購読モデルからオープンアクセスにした場合は、そのインパクトは大きく、著者負担モデルも成り立つであろうと考えられます。しかし、名前さえ知られていないジャーナルがいくらオープンアクセスにしてもそのジャーナルが成長していけるかは、オープンアクセスだけでは、すでに無理なのではないでしょうか。すでにと申しますのは、つまり、電子コンテンツが大変な量になっているという背景を踏まえてのことです。この部分に関しては、日本の多くのジャーナルはよほど真剣に策を練らねばなりません。

投稿料モデルというのは、出版そのものを投稿者が支えるという話です。今これで出版されているジャーナルは、全ジャーナルの１％ぐらいでしょうか。投稿料等に代わる原資として考えられたものは、国の助成金だろうということで、これは各国とも相当に議論を行ったようですけれども、やっぱり安定性がないということになりました。そして、結局は受益者負担、投稿料でまかないましょうという話が残りました。

機関リポジトリ

さて、機関リポジトリの話です。

ひとつは大学からの情報発信の、統一的な窓口として機能し、大学における研究成果の社会への還元と、その説明責任を果たし、研究機関としての知名度を上げることができるかもしれないという可能性を持った新しいシステムです。もしかしたら、京大の先生が書かれた研究成果を読んで、海外から京都大学に来ようという学生がでてくる、そういうチャンスが、機関リポジトリにはあるかもしれない。もうひとつの役割は、いずれ学術情報の流通自体を変革する力になる可能性も秘めています。

大事なことなので、今の段階で覚えておいていただきたいのですが、各国はリポジトリ方針の策定に入っており、それは機関リポジトリへどういう査読済み論文をデポジットするかということに始まり、いつデポジットするかということ、それを強制的にするかどうかということを大きな問題としています。なぜかと申しますと、査読済み論文がどんどん、リポジトリされてしまうと、もう既存のジャーナルが購読されないじゃないかという不安が学協会側にあるからです。しかし、皆が、つまり大半の研究者が一斉にこれをやるかどうか。今はやっていませんし、たぶん、９割方の研究者は、興味はない話なのです。しかし、もし「強制的」にリポジトリすることを国が決定すれば、ジャーナル購読という形は破壊されます。しかし、そうしようという動きと、それは困るという動きのせめぎ合いの中でリポジトリ方針が策定されている、と認識を持つことが重要です。ひとこと付け加えれば、リポジトリが進んでも、「学会には、そのジャーナルの査読、そのジャーナルがどういう論文を採択するかという機能は残ります」と申し上げておきます。

さて、争点はいつリポジトリするか、これは即時なのか、制限を付けるかということです。それから、どこにリポジトリするか、中央型のアーカイブか機関リポジトリかということです。何をリポジトリするか、著者版か出版版か。アメリカの物理学会は自分たちがオーサライズした出版版しか、リポジトリしては駄目と言っています。自分たちのジャーナルに載った出版版を出せということで、現況では、何をリポジトリするかは学会に任せられています。

そして、話してまいりましたように、強制的にするかどうかです。この強制的かどうかというのは、研究者にとっては非常に大きな問題だと思います。しかも、これが科学研究費と不可分になるという話が、海外ではあります。日本ではどうなるか私にはわかりませんし、またそうすることが本当に良いかも実際のところわかりません。しかし、それでも、私が見る限りは、Zoological Scienceの掲載論文すべてが、どこかのリポジトリに即時にデポジットされてしまい、Zoological

Scienceは購読されなくなるということは、ここ数年は起きないと断言できます。

オープンアクセスの動き

アメリカと英国の状況についてリポジトリは政策として検討されてはいますが、研究者はそのように動いてはいません。

私が言いたいのは、本当のオープンアクセスを目指すのならば、研究者が何を望むかということが一番大事だということです。研究者にとっての最適な環境としてのオープンアクセスです。

大事なことは研究者が何を望むかです。本当に、オープンアクセスが理想なのでしょうか。それはまた、自分のために、そしてほかの研究者のためにリポジトリをするという行動を取ることができるのかを意味するということです。学術情報の主体は研究者です。そして研究者がなにを選ぶかが重要です。

アメリカでは医学ジャーナルを持った患者が、ある論文を示して、私の病気を治せないでしょうかと病院にやって来る。アメリカ国民にとっては、医学系ジャーナルがオープンアクセスで国民が皆,読めたら良いのにと考えることはわかります。しかし日本ではどうでしょうか。

日本の状況は少なくとも米国とは違うと考えるべきだと思います。日本のオープンアクセス、本当のオープンアクセスとは何かということを考えるチャンスが、私は日本にあると思っています。私たちは日本語が母語なのですから、英語の学術論文が公開されて真に役に立つのは、やはり研究者でしょうから、研究者の方によく考えて頂きたいと思います。

おわりに

そして、「科学技術基本計画」ですが、ここでは「研究者が公的な資金助成の下に研究して得た成果を公開する目的で論文誌等で出版した論文については、一定期間を経た後は、インターネット等により無償で閲覧できるようになることが期待される」となっています。最後の「期待される」という言葉でとにかくは収めたということです。しかし意味は十分あると思います。これから、10年経たのち、生き残っているジャーナルの中に、日本のジャーナルがいくつあるかという時代だと思います。はっきり言えば、これから10年で、どこまで日本のジャーナルが、駆け上れるかなのです。それを可能にするのは、実はまた研究者なのですね。しかし、それでも、リポジトリに賛同するかどうかの選択権は研究者にあると私は思います。研究者が決めるしかないと思います。

一方、図書館がやらなければならないことは沢山あるはずです。特にリポジトリのことは非常に大きい問題だと思います。京都大学の研究者の望むリポジトリの方向を進んでいただきたいと思います。

（ながい　ゆうこ）

(1)　シリアル・クライシス

学術雑誌の供給量の急増と価格の高騰，それに伴う雑誌購入費の増大という危機。

(2)　SPARC

（Scholarly Publishing and Academic Resources Coalition ）

1998年に米国研究図書館協会によって設立された組織。学術雑誌の価格高騰 を防ぐことを目的のひとつとする。

※平成１８年度京都大学図書館機構公開事業

「発信する情報コンテンツ」のページ

http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/modules/tinyd5/content/18koukai.html

※京都大学学術情報リポジトリのページ

http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/

京都大学の図書館の将来構想（案）を検討しています

―京都大学図書館機構（将来構想（案））―

背景

国立大学が法人化された平成16年４月に図書館協議会、１年後の平成17年４月に京都大学図書館機構が発足し、全学的な図書館機能の充実を図ってまいりました。協議会には、情報資源、サービス、組織をそれぞれ重点的に検討する３つの特別委員会が設置され、当面の諸課題の検討がなされています。検討の成果としましては、平成18年４月からは、学内デリバリーシステム（図書等の部局間配送）の運用開始や情報基盤の強化・充実のための電子ジャーナルの充実方策の検討、基盤強化経費による遡及入力事業の推進、学生用図書の充実等があります。

情報化社会の急激な変化に伴う学術情報の電子化の進展、流通形態の歴史的な変革を遂げている現在にあって、京都大学が世界的に卓越した大学として学術の発展を推進していくためには、教育・研究を支える学術情報基盤としての図書館機能の拡充・強化は今後ますます重要となります。

このためには、京都大学図書館機構のミッションやグランドデザインとも言うべき将来構想を確認、共通理解を得て、京都大学図書館機構の図書館群が一丸となって、全学の学術情報基盤を総合的に強化・充実していくことが求められます。

京都大学図書館機構将来構想企画検討会の設置

これらの中長期課題を検討し、将来構想の原案を作成するために、図書館機構長の私的諮問機関として平成18年８月に京都大学図書館機構将来構想企画検討会が設置されました。

また、原案作成にあたっては副機構長を中心としてプロジェクトを形成し、全学から選定された図書系職員からなる総括ＷＧ、組織・資源ＷＧ、サービスWG、電子ジャーナルWG、リポジトリ・電子図書館ＷＧの５つのＷＧを立ち上げています。

京都大学の基本理念、中期目標・中期計画及び科学技術・学術審議会の報告（科学技術・学術審議会の「学術情報基盤の今後の在り方について」（報告）平成18年３月23日）等、学内外の新しい動向を念頭に、若手図書館職員の自由闊達な発想を活かし、一人ひとりの図書館職員が自らの問題として図書館の将来、経営に関わることでモチベーションを高め、図書館職員全体の資質向上を図りつつ、京都大学の特色を生かした新たな図書館像を作り上げることを目指して鋭意検討を進めています。

同時に、この企画検討会は、図書館業務改善検討委員会（全学の図書系職員で構成）、附属図書館研究開発室と強力に連携を保つため、検討状況をそれぞれの会議に報告し、貴重なご意見を頂いています。

中間報告会等

平成18年11月２日（木）第３回図書館協議会において企画検討会設置の趣旨及び検討状況を審議していただいたうえで、協議員をメンバーとする「図書館ミッション検討WG」（座長：副機構長）を設置、現在将来構想の根幹となるミッション（案）の検討を重ねています。

また、平成18年11月22日（水）には、附属図書館ＡＶホールにおいて中間報告会を開催し、パワーポイントの資料で将来構想の方向性をわかりやすく報告するとともに、できるだけ多くの関係者から意見や要望を得るべく努力してまいりました。

今後

平成19年３月を目途に、企画検討会として将来構想案を報告書としてまとめ機構長に答申するとともに、図書館協議会においてご審議頂き、「京都大学図書館機構将来構想」として京都大学の学術情報基盤を支える図書館の中長期的なグランドデザインの確立を目指していく所存です。

（文責：副機構長　岡田）

＜一冊の本シリーズ 5＞

荘子と「両行（りょうこう）」を生きる

京都大学大学院教育学研究科教授　**やまだ　ようこ**

彼らにとって人生とは、そのまま理想につながる直線的なものではなく、遠まわりし、後ずさりし、傾き、また覆（くつが）える曲線的なものであった。・・・・そこではもはや、人間が「喪（うしな）う」ことなしには「得る」ことが考えられず、「亡びる」ことなしには「存（なが）える」ことが考えられなかった。「死ぬ」ことを考えることなしには「生きる」ことが考えられず、「無い」ことを考えることなしには「有る」ことが考えられなかった。彼らは人間と人間の歴史を包む自然の悠久さに憧憬した。進むことのいさぎよさよりも退くことの強靱（じん）さに刮目（かつ）した。彼らの否定と逆説の哲学が、そこから成立するのである。
（福永光司『荘子　内篇』朝日新聞社　解説p.９）

私は子どものころから花札ゲームをするとき、「フケ」という役が好きだった。「フケ」というのは、点数の多い札を集める「獲得」「成功」路線の逆を行って、みんなが欲しがる点数の多い札をひたすら捨てつづけて減点し、最後に20点以下でゲームが終了したときには、一気に「逆転」して優勝するという例外的な役である。

子どものときには、正道に反して、人の逆を行く天邪鬼を好むものだが、大人になるにつれて、それは確率的にたいへん割の合わない話だということがわかってくる。それでもまだ、40代の半ばになっても、友人から、私がめざしている研究方向をさして、「この人は、減点札を集めていけば、いつかは必ず逆転すると本当に信じているみたいだよ」と笑われた。

幸いにして世の中のほうが変わってしまって、ひとり孤独に逆方向めざして出発したマイナーな研究路線が、現在では必ずしもそうではなくなり、光をあびるようになったのだから、時流などというものはわからない。

子どものころから『荘子』を読んでいたわけではないが、彼の思想は青年時代から私の生き方にぴったりはまり、血肉になっただけではなく、『荘子』の危ない毒にもすっかりはまってしまった。

私の手元にあるのは、福永光司先生が訳された『荘子　内篇』（初版、1966年刊、朝日新聞社）である。福永先生に直接教えを受けたことはなく、門外漢の自由さも手伝って、私は自分流に勝手に読んできた。

福永訳の魅力のひとつは、簡潔な原文と対照され「両行（りょうこう）」する、流麗な日本語の書き下し文の美しさにある。「両行」とは荘子のことばで、「二つながら行われていくこと、矛盾の同時存在」である。このことばは、今では私が専門とする生涯発達心理学の理論モデルの中核となり、最近のアメリカの学術誌“*Culture* & *Psychology*”などにも論文を発表して、海外の研究者にも注目されるようになった。

福永先生の訳は、原文を日本語に置き換えるのではなく、訳自体が原文と拮抗し「両行」するものである。素人ながらに「ここまで言っても、いいものだろうか」と思うような、自在な訳もあるが、それだけご自身が身をもって入れ込んでおられたのだろう。

私がおおきな影響を受けたのは、ルビの「両行」的な使い方である。「逍遙遊（しょうようゆう）」に、「逍遙（こころまかせ）の遊（あそ）び」とルビがふられると、その意味が何の注釈もなく、胸に深くすとんとおちて、魅力的に響いてくる。また漢字に和文のルビをつけることで、「二言語」を併用した多声的な

意味がうまれる。

私は同じような手法で、日本語に英語のルビをふる用法を専門用語として活用してきた。たとえば「現場（フィールド）」と表記すると、日本語のもつ、今ここでまさに起こるという意味の「現場（げんば）」と、原野という意味の「フィールド」、両方の意味を共鳴的に複合できる。専門用語も、表層を流れるカタカナ語のオンパレードにしたくない、しかし日本語だけでは不十分というときにも、ルビが役に立つ。それで「生成継承性（ジェネラティヴィティ）」「省察性（リフレクシビティ）」など、ルビ付きの訳を試みてきた。

今、私は『喪失の語り－生成のライフストーリー』（新曜社）という本を刊行するために、あとがきを書いている。そこであらためて『荘子』を読んでみて、その解釈はさまざまな可能性にひらかれていると感じる。この本では、「喪失」を「生成」と両行的にむすびつけようとしているが、私のめざすものが単なる「逆転」ではなく、「両行」なのだということが、ますますはっきりしてきた。

荘子は、自己を「喪った」ときの姿を、最愛の妻を「喪った」ときの姿になぞらえている。外から見れば妻を喪ったときのように生気なくひからびているようでも、その当事者にとっては自由に空を舞いながら胡蝶の夢を見ているのかもしれない。また「喪う」ことによって、自己はかつての自己ではなくなり、新しい自己に生まれ変わるのである。次のような私流の訳も、きっと福永先生は大目に見てくださるにちがいない。

「喪（うしな）う」ということばが胎んでいる矛盾を含みこんだ多重の意味、その多声の響きを我が身を痛めながら覚知していくプロセスが、生きるということかもしれない。

シキは、机にもたれて坐り、天を仰いでふうと息をついています。そのうつろなさまは、妻の喪（も）にふくしているかのようです。

シユウは、問いかけました。「いかがされましたか。体は枯れ木のよう、心は死に灰のようではありませんか。今、机にもたれている者は、昔（かつて）、机にもたれていた者とは、非（ことな）っております。」

シキは、言いました。「よい問いですね。今、私は我を喪（うしな）っていました。あなたはこれを知っていますか。」

（『荘子　内篇』齊物論篇より　やまだ訳。）

（桂）図書館棟寄付の無期延期に伴いバックナンバーセンター（ＢＮＣ）及び理工学系外国雑誌センター移設計画も白紙に

2006年11月20日に京都大学ホームページのニュースリリースで報じられたとおり、京都大学（桂）図書館棟の建設が寄付者の意向により無期延期になりました。
それに伴い（桂）図書館棟内に自動化書庫を設置して附属図書館ＢＮＣの自然科学系外国雑誌の一部及び理工学系外国雑誌センターを移設する計画も白紙に戻りました。

なお、工学研究科・情報学研究科の合同図書館の性格も兼ねる桂キャンパスの拠点図書館建設は桂キャンパスの整備計画に明記されており、京都大学とって重要な懸案事項でありますから建設に向けて学内で継続して新たな方策を検討することになっております。図書館機構としても推移を見守り関係部局と協議して対応していく予定です。

バックナンバーセンター：http://www3.kulib.kyoto-u.ac.jp/BNC/framebnc.html

理工学系外国雑誌センター：http://www3.kulib.kyoto-u.ac.jp/etc/gaikoku-j/gaikoku.html

図書館システム更新

平成19年2月、図書館システムが更新されました。このシステム更新により、図書系職員が図書館業務をおこなうための業務システムと、OPACや電子図書館などの利用者サービスシステムが、この2月から4月にかけて、新システムに順次移行していきます。

今回のシステム更新についていくつか特徴を挙げます。

■共同調達：教育用コンピュータシステムと共同調達となり、システム連携や相互の機能補完を図るとともに調達コストを削減しました。

■図書館業務システム：クライアント / サーバー型のシステムから、Webベースのシステムに移行することにより、システム全体の軽量化と機動的な端末運用を可能としました。また、更新を機に、図書館業務で使用するコード体系を大幅に見直し、学内外の他システムとのデータ連携がスムーズに行えることとなりました。

■利用者サービスシステム：OPACを中心に、インターフェースや検索エンジンの変更が行われ、より使いやすくより高度な機能を提供します。また、認証サービスが教育用コンピュータシステムと連携することにより、図書館独自のアカウントを別途取得する必要なく、教育用コンピュータシステムの利用者コードによる認証でご利用いただけるようになります。

図書館システムは、一部のシステム関係者がつくるものではありません。職員、利用者、一人一人がつくりあげていくものです。今後も、日常的に、改善・進歩をしていく所存ですので、現場の職員およびご利用の皆様からのご意見、ご指摘、ご要望をお待ちしております

新OPACの愛称が決まりました！

【新OPAC愛称募集の選考結果】

最優秀賞　KULINE（クライン）
（Kyoto University Libraries Information NEtwork system）
受賞者　松岡正志　様　（法科大学院）

インターネットで提供している図書館サービスが、この4月より、さらに使いやすく、装いも新たに生まれ変わります。

このリニューアルを機に、昨年末、皆様からOPAC（オンライン蔵書検索システム）の愛称を募集し、厳正な選考の結果、「KULINE（クライン）」という呼称を採用させていただくことになりました。響きがよく、「クラインの壷」への連想から京都大学の基本理念に結びつけて命名したという松岡さんの説明に説得力があったのが、選考の主な理由です。

この応募に対しては、学生だけでなく教員や職員の皆様から計102通ものご応募をいただき、新サービスへの関心を寄せていただけたことに、感謝を申し上げたいと思います。

去る2007年2月19日（月）に表彰式がおこなわれ、受賞者の松岡さんに表彰状と副賞の図書カード1万円分が渡されました。

学術情報基盤強化経費（約1.67億円）の配分を受けて図書館機能の強化･充実を図っています

平成18年度から京都大学における戦略的な財政運用策のひとつとして、戦略的・重点的配分経費枠に基盤強化経費が創設されました。これには全学機構および全学施設の運営費や活動費等の支援経費が含まれています。

これまで、学習・教育・研究のインフラストラクチャーである学術情報基盤としての図書館機構の強化・充実のために全学的な運用が必要とされる事業について、全学の図書館が共同で学生用・留学生用図書経費や遡及入力経費、電子ジャーナル契約のための経費等を毎年要求してきましたが、平成17年度までは単年度経費である全学共通経費や総長裁量経費の枠組みしかありませんでした。学術情報基盤としての図書経費は、性格的に単年度経費にはなじまないと同時に、従来の枠組みは単年度ごとに変動を繰り返す不安定な財源であったと言えます。

今回、運営費交付金を財源とする基盤強化経費が創設され、図書館機構に学部学生用図書経費、留学生用図書経費、遡及入力経費、電子ジャーナル経費、データベース経費、貴重書補修経費として約167,000千円が配分されました。執行結果の報告や次年度の要求は図書館協議会を介して実施しますが、少なくとも第１期中期計画の残る３年間は安定財源になりますので、年度当初からの計画的執行・運用が可能になり、これまでより安定した図書館運営、強化・充実策が実施できるものと期待しています。

図書館機構は、全学的に図書館機能の強化・充実を図るため、効果的・効率的にこの経費を活用し、適正な執行に努めています。

学部学生用図書については、毎年学部学生１人あたり１冊の新刊図書の購入を目指しています。学生からの購入希望図書も受け付けています。是非図書館機構や附属図書館のＨＰから申し込んでください。留学生用図書については、留学生センターと共同して充実を図っています。蔵書データの遡及入力は中期目標・中期計画として平成16年から６年で210万冊の遡及入力を達成する計画を立て、進行中です。各部局の独自経費による努力と基盤強化経費の支援を受け、平成18年度末までには年度計画の42万冊を超える入力を達成できる予定です。

国宝・重要文化財を含む貴重な資料を多数所蔵する京都大学には、人類の遺産とも言うべき貴重な資料がありますが、その中にはまだ修復されず、劣化状態のまま残っているものが少なくないため、それらの修復を計画的に推進します。

電子ジャーナルについては、図書館協議会で全学的な協力・連携・調整の体制作りの真最中です。残念ながら他の大規模大学に比べて、京都大学では十分な雑誌タイトルの提供ができているとは言えない状況であり、その抜本的な打開に向けて検討を重ねています。いっそうの全学的な財源措置が求められています。

今後、図書館機構として、将来構想を策定しながら、世界に卓越した大学を目指す京都大学にふさわしい学術情報基盤の強化・充実を図って行く所存です。

（文責：大西図書館機構長）

よくある質問と回答（FAQ）第３回

Ｑ．附属図書館３階の研究個室を、平日の17時以降と、土曜・休日開館時間帯でも利用できるようにしていただけないでしょうか

Ａ．現在、研究個室・共同研究室は１階カウンターで受付・鍵をお渡しして利用いただいています。これは「研究個室」は、袋小路になっている他に廊下からは死角となっているなど開放的でないことから安全面に不安を抱く向きもあるため、利用者や職員が少なくなる夜間や休日の利用時間帯を制限して16時45分までの運用とさせていただいております。

なお、附属図書館では３階について、「メディア・フロア」として整備・充実する計画を立てております。視聴覚資料の視聴のための「メディア・コモン」は学内予算を得て整備し平成16年５月に新装オープンし、情報端末室と共に閉館時間の30分前まで開室しています。残る研究個室・共同研究室・情報端末室についても、使いやすく、見通しが利き、明るいメディア・フロアとして改修するための予算要求中です。改修後は運用面の見直しも実現したいと考えております。

附属図書館３階

Ｑ．附属図書館の入館ゲートは、持ち出し防止と学外利用者入館制限の為だけなら、よく詰まるし不便きわまりないため無用ではないか。

Ａ．入退館ゲートは、学内者だけで日々３千人以上（試験期には５～６千人）の利用者が入館する附属図書館においては、利用者のスムーズな入退館を保障し快適な利用をサポートするためには省力化を図る上で不可欠な設備となっております。この方式は国内を問わず、利用者の多い大学図書館では共通の措置でもあります。かっては、バッグ、コート類の館内持ち込みは厳禁で、持ち込み資料も限定されていましたし、また持ち込めないこれらのものを預けるロッカーがどの図書館でもかなりのスペースを取っていました。更には退館時の無断持ち出し点検のために人手の確保も必要でした。このような効果を是非ご理解ください。

また入館ゲートを通過する際に集計される数値データ（個人を特定する情報は採取していません）は、利用者動向の分析等に利用しサービスの向上に役立てております。

なお学外者の利用については、入館ゲート通行に必要な学生証、職員証など本学の身分証明証を持たないため別途インフォメーションで受付けておりますが、自習室的な利用を除き蔵書の利用を中心に市民開放も積極的に行っておりますのでご理解ください。

Ｑ．各社の携帯電話から附属図書館のＯＰＡＣ（オンライン蔵書検索）の利用を可能にして欲しい。

Ａ．平成19年２月１日から、図書館業務システムを順次更新しております。この中で、携帯電話用（ＮＴＴDoComo，au，Vodafone）ＯＰＡＣも４月からサービス開始予定です。
いましばらくお待ちください。

図書館の動き

平成18年

12月1日　平成18年度国立大学図書館協会
近畿地区事務連絡会
4日　京都大学図書館機構将来構想検討会
15日　京都大学図書館協議会第一特別委員会
（情報資源）（平成18年度第4回）
18日　次期図書館業務システム概要説明会
（22日も同一内容で開催）
20日　平成18年度京都大学図書館機構公開事業
「発信する学術情報コンテンツ―京都大学
学術情報リポジトリ構築のために」
（桂キャンパス）
21日　図書系連絡会議

平成19年

1月5日　第2回国立大学附属図書館の課題に関する
館長懇談会（～6日）
12日　私立大学図書館協会西地区部会・京都地区
協議会相互協力連絡会第13回研修会
「大学図書館における地域連携を検証する」
（於:同志社大）
17日　京都大学図書館協議会第一特別委員会
（情報資源）（平成18年度第5回）
22日　学術情報リポジトリ検討委員会（第4回）
25日　図書系連絡会議
2月6日　京都大学図書館協議会幹事会
（平成18年度第4回）
15日　京都大学図書館協議会認証システム監理
特別委員会（第2回）
16日　京都大学図書館協議会（平成18年度第4回）
28日　大学図書館近畿イニシアティブ運営委員会
（第2回）（大阪市大）
3月1日　図書系連絡会（2月分）
2日　4th Inter-Library Forum
（アメリカ大学図書館の動向）
6日　京都大学図書館協議会第一特別委員会
（情報資源）（平成18年度第6回）
16日　京都大学図書館協議会幹事会
（平成18年度第5回）
20日　京都大学図書館協議会
（平成18年度第5回）
22日　図書系連絡会議
26日　京都大学附属図書館研究開発室会議
（平成18年度第2回）

目　次

◎ 学術情報のオープンアクセス―何が有効な手段なのか ……永井 裕子… 1
◎ 京都大学の図書館の将来構想（案）を検討しています …… 6
◎ 荘子と「両行」を生きる＜一冊の本シリーズ　5＞…… やまだ ようこ… 7
◎（桂）図書館棟寄付の無期延期に伴いバックナンバーセンター（ＢＮＣ）
及び理工学系外国雑誌センター移設計画も白紙に …… 8
◎ 図書館システム更新 …… 9
◎ 新OPACの愛称が決まりました！…… 9
◎ 学術情報基盤強化経費（約1.67億円）の配分
を受けて図書館機能の強化・充実を図っています …… １０
◎ よくある質問と回答(FAQ)第３回 …… １１
◎ 図書館の動き …… １２

編集後記

「静脩」のオンラインの提供に向けて、PDF化する作業が進んでいます。既にPDF化されている号も含めて、創刊号からすべての号を記事単位にPDF化して京都大学学術情報リポジトリに登録します。これによって、湯川秀樹、桑原武夫ほかたくさんの著名な研究者の随筆をオンラインで読むことができます。純粋な研究成果の論文ではありませんが、深い学問的知識に裏打ちされたエッセンスを読むことができますので、ご期待ください。(t)

京都大学図書館機構報「静脩」Vol.43 No.3・4（通巻156号）2007年３月30日発行　編集：「静脩」編集小委員会
（責任者：附属図書館事務部長）発行：京都大学図書館機構　京都市左京区吉田本町36−1　Tel.075‐753‐2691